

ほほえみ 第89号



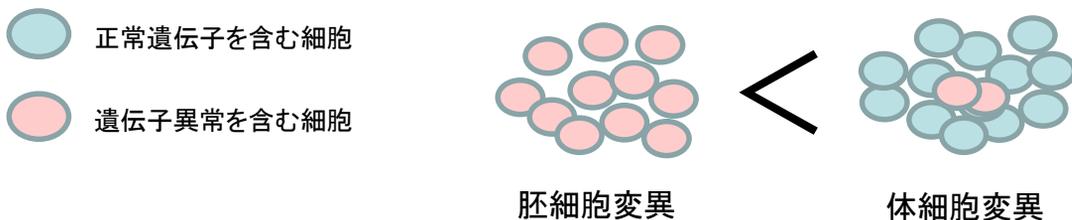
ほほえみ読者の皆様は、いかがお過ごしでしょうか。3月下旬から、急速に春めいてきました。それと共に、花粉症の症状も強くなり、今年は花粉の飛散量が多いのかと思わせるような経過です。抗アレルギー剤のお世話にならずに済んだ年が多かったのですが、今年は、やむを得ず薬局から抗アレルギー剤を買って内服しています。通常、桜の散る辺りで、花粉症は良くなってくるので、あと3週ちょっとかなとは思っていますが。

がんと遺伝子

がん診療では、発癌過程や、予後予測、治療効果予測といった観点で、遺伝子との接点が大きいのですが、最近、遺伝子医療を日本として推進しようという動きがあります。遺伝子の解析方法には、遺伝子の変異を調べる方法、遺伝子の発現量を調べる方法など、幾つもの方法があります。実際には、遺伝子についての誤解は多く、今回は、この問題を取り上げてみようと思います。

がんは、遺伝子の病気と言われます。この言葉がまず、誤解を招きやすいものですね。「がんになったのは、遺伝なの・・・」というご質問を、時折お受けします。これは、多くの場合、当てはまらないものです。しかし、それを理解するには、遺伝子変異の起き方について知る必要があります。

遺伝子の変異には、生まれつき全身の全ての細胞に同じ遺伝子変異がある胚細胞変異と、特定の細胞だけ、がん細胞にだけ変異がある、体細胞変異の二つがあります。



一見してわかるように、胚細胞変異は、体の全ての細胞に変異があり、相対的に早くがん化しやすいので、家族性のやや若い段階で発症するがんが多く、体細胞変異は、体の一部の細胞の遺伝子変異が生じ、がん化するものです。胚細胞変異のがんは、ごく一部であり、多くのがんは、体細胞変異によるものです。

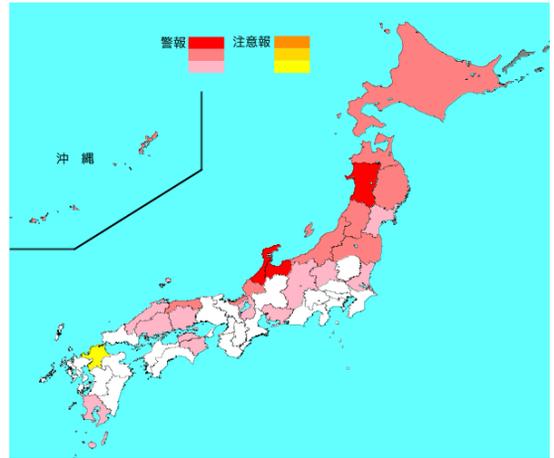
胚細胞変異の場合でも、親から子供へ、完全に同じ遺伝子が引継がれる訳ではなく、子供は両親からの遺伝子を半々づつもらうので、遺伝子の種類によって、25%とか、50%とかの確率で親から子供に引き継がれます。

遺伝子変異が生じ、がん細胞が発生しても、それは最初是一个の細胞です。徐々に細胞分裂して増えていくのですが、1cmのサイズになるまで(1cm以下のがんは多くの場合、早期です)、細胞としては10億個ぐらい必要なのです。診断できるサイズになるまで、相当の長い年月が必要だということです。認識されないで過ごすがんの期間は、がんと診断がついた後の期間より3倍程度長いといわれています。

インフルエンザの終息が近い？

先々月、久しぶりにインフルエンザBとなり、お休みをいただいたのですが、ようやく、盛岡もインフルエンザの終息に向かっているようです。

私自身は、残念ながら、今期は予防接種にもかかわらず、インフルエンザの感染は避けられなかったのです。抗インフルエンザ薬は、インフルエンザウイルスの増殖を抑えるものなので、感染そのものは阻止しません。今後、感染を阻止するような治療法の開発が進めば、季節性のインフルエンザに限らず、新型インフルエンザの心配も、大幅に軽減するのですが、なかなか、難しいですね。西日本では終息しているところも多いので、もう少しで、東日本インフルエンザの流行も終息すると思われるます。



2018年3月30日 国立感染症研究所のホームページより

春の芽吹き

最近、暖かくなってきたせいか、庭の落ち葉を払って掃除をすると、小さな芽吹きをあちこちに見つけ、宝物を見つけたように心躍る気分がします。チューリップの芽が出ると、特に代表的な春の花だけに、開花を心待ちにするところが大きくなります。

つるバラも芽吹きの子供ですが、日当たりにも左右されるようで、やはり一日中、日当たりの良い場所の芽吹きが良いようです。多くのつるバラは3回目の春を迎えるので、今年は真価が発揮されるだろうと思っています。ガーデン・デザインするには、テーマを決めており、少しずつ、思い描いた形に近づいています。



MEMO

4月のがん化学療法科の予定

4月3日	診療応援(平出先生)
4月10日	診療応援(平出先生)
4月17日	診療応援(平出先生)
4月24日	診療応援(工藤先生)
4月29日	昭和の日
4月30日	振り替え休日

